

白河（福島）にみる〈恋・愛〉の日本文学

―歌枕・旅枕・恋枕―

竹内清己

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

能因法師 後拾遺和歌集

一 序

題辞にかかげた能因法師の歌の白河の関という地は、陸奥の著名な出入り口。京の都を春霞とともに出立したが、道中、時空長きなか、今は秋風が吹く白河の関となった、というのである。この歌が、江戸の松尾芭蕉の「奥の細道」の発端を導く。隅田川を「春立てる霞の空に」、「白河の関越えんと」に倣われている。「弥生も末の七日」、「千住といふ所にて船を上げれば前途三千里の思ひ胸にふさがりて」、「奥羽長途の行脚」は、能楽の「遊行柳」の地にいたる。「清水流るゝの柳は、蘆野の里にありて、田の畔に残る」となり、「心もとなき日数重なるまゝに、白河の関にかゝりて旅心さだまりぬ。」となる。まことにこの歌枕の地は、日本文学、日本人の心のふるさとである。能楽「遊行柳」の詞章から入る。

ワキの遊行上人は、「上総の国に候ひしが。これより奥へ」と、「心

の奥を白河の。関路と聞けば秋風も」と、能因法師の「秋風ぞ吹く白河の関」に倣って、「音に聞きし白河の関をも過ぎ」、前シテの尉に呼びかけられる。そうして西行法師の新古今和歌集の次の歌が引き出される。

道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ

この曲の資材はこの歌に基づき、それに遊行第十九世・尊皓上人の逸話を結びつけて、脚色したものである。次第は、「帰るさ知らぬ旅衣」と始まる。道行に「急ぎ候程に。音に聞きし白河の関をも過ぎぬ。」と、「古塚の草深き。朽木の柳の木の下より。その様化したる老人」が烏帽子狩衣を着しつつ。現れる。老人は「はや我が姿はあらはし衣の」と謡う。これすなわち源氏物語「藤袴」の「この御あらはし衣の色なくは、同じ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよ託言ばかりも」の「道の果てなる」と、「柳桜をこき交せて錦を飾る諸人の。花やかなるや小簾の隙洩り来る風の匂ひより。手飼の虎の引き綱も。長き思ひに楢の葉の。その柏木の及びなき。恋路も由なや。」と、柏木が女三の宮の懐から飛び出した猫が御簾の外に出たのを拾う。そうし

た恋路が引き出さる。上人の御法を受け。喜ぶ報謝の舞も。これまでなりと。名残の涙の玉にも貫ける。春の柳の暇申さんと。木綿附け鳥も啼き別れの曲にも、古今和歌集、遍照の歌、

浅緑糸よりかけて白露を珠にも貫ける春の柳か

「白露を珠にも貫ける春の柳」が踏まえられ、素性法師の「見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」と、「草の枕の一夜の契りも。他生の縁ある上人の御法」「西吹く秋の風」は題辞の能因の「秋風ぞ吹く」に連なり……「露も木の葉も。散りぐに成り果て、。残る朽木と。なりにけり」と、曲は閉じられる。

* (白河(福島)に関する地名に傍線)、歌枕・旅枕・恋枕を導く鍵語に傍点を付した。

二、旅と〈恋〉愛

旅は日本文学の始まり。草枕の旅、旅の枕詞の草枕は旅枕となる。上総から白河へ。関を過ぎ老柳の精に逢う。それは旅―〈恋〉愛を導く。旅・恋・愛の語彙を列挙する。

旅―リヨ・たび・流れ・羈・度・渡・途……

旅枕・旅路・旅衣・旅車・草枕・羈旅・流浪・流人・放浪・旅行・旅寝・旅寓・旅泊・旅人・道行・道中・旅鳥……

源氏物語の柏木の及びなき。恋路も由なしやの恋は、

恋―レン・たま恋い・たま乞い・懐かし・慕わし・忍ぶ・思ぶ・思

ふ・想ふ・念ふ……

恋枕・恋路・恋衣・恋草・恋車・恋種……

そして逢いは愛の執心を表す。

愛・哀―エ・アイ・いとし・いたわし・いつくし・おし・おしむ・

めぐし・うるはし、愛 である・めぐし・かなし・哀れ・憐れ……

愛情・愛着・愛欲・愛執・愛憐・愛染・愛慕・愛惜、慈愛・慈悲・

哀憐・可憐・憐憫……

こうした地味な「遊行柳」一曲にも、日本文学のさね、様式が堅持される。白河はその象徴の典型の地であった。

三、日本古典から

日本古典から福島(白河)にかかわる歌枕・旅枕・恋枕をたどる。ここでは代表的な一節をあげる。まず、上代の古事記や日本書紀に遠つ国、東の国と呼ばれる東国の関は、

枕草子(岩波文庫)百十一に、「関は。逢坂。須磨の関。鈴鹿関。

岫田くまたの関。白河の関。衣の関。」とある。「それを勿来の関といふやあ

らん。逢坂などを、さて思ひかへしたらんは、わびしかりなんかし。」

と続く。また、源氏物語(新潮古典集成)「桐壺」に、

宮城野の梅雨吹きむすぶ風の音に小萩がもとを想ひこそやれ

これは、光源氏を生んだ桐壺の更衣、更衣の母の、帝への歌である。その宮城野は、白河から入った陸奥が、現代の仙台地方の歌枕。

その歌枕が母を失った「小萩」、光る宮を思いやっつてほしいと言うのである。「須磨」の流離の光源氏を、「須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこしとほけれど、行平の中納言の、「関吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、」とあり、また行平の歌、

「旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風

を踏まえた須磨は、白河の関をこえて宮城野の松島、塩竈にかよ
う。「玉鬘」にも、「よろづのうた枕、よう案内知り、見つくして、そ
の中の言葉を取り出づる、詠みつきたる筋こそ、つよく変らざるべ
れ。」とある。歌枕は東国の旅枕・恋枕の宝庫なのである。

古代を万の言の葉の万葉集にさかのぼって。万葉集（新潮古典集

成）第十四の東歌は、駿河―相模―武蔵野―安房―上総―下総―常

陸―、

会津嶺の国をさ遠み逢はなくば偲ひにせもと紐結ばさね

筑紫なるにほふ児ゆゑに陸奥の可刀利少女の結びし紐解く

安太多良の嶺に臥す鹿猪のありつつも吾は到らむ寝処な去りそね

また、第十六に、福島出身の采女の歌、

あさか山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわがおもはなくて

が、古今和歌集の仮名序で貫之が歌の源流としている。（恋―愛）
のふるさと福島は、「安積山の言葉は采女のたはぶれよりよみて、」と
ある。「歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける。」とあ
る。伊勢物語（岩波文庫）でもその初段に初冠をすませた在原業平の

昔男が、

かすが野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず

みちのくの忍もぢずり誰ゆへにみだれせめにし我ならなくに

とあり、これは、古今和歌集恋四の河原左大臣源融の歌とされる。

源融は光源氏のモデルの一人。源氏の六条院に比せられる寝殿の池に
は、塩竈・松島の潮を運び入れた大貴族である。十五段にも

しのお山のびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく

とある。以後の和歌集におおよそをたどる。拾遺和歌集に、

陸奥の安達が原の黒塚に鬼籠れりといふはまことか 平兼盛

陸奥の安達の原のしら真弓心こはくも見ゆるきみかな 読人知ら

ず

後拾遺和歌集に

都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河のせき 能因法師

まさに、「遊行柳」の道行に、「秋風も。立つ夕霧の何処にか」と夕

霧に続く。中世を代表する西行の山家集に「白河の関に留まりて、所

柄にや、常よりも月おもしろくあはれにて、能因が秋風ぞ吹く、と申

しけん折り、何時なりけんと―関屋の柱に書きつける。」

とあり、

白河の関屋を月のもる影は人の心を留むるなりけり

と。白河の宗祇戻し、庄司戻しは、現在の白河市の名所旧跡である。

阿武隈の川瀬にすめる鮎にこそうるかといへるわたはありけれ

さらには、中世に成立した能楽の詞章・謡曲に特化して挙げる、冒頭の「遊行柳」の他に、謡の定家に、「忘れぬものをいにしへの。心の奥の信夫山。忍びて通ふ道芝の露の。世語りよしぞなき」・「忍ぶとも色には出でよその名をも今はつつまじ」とあり、心の奥は、道の奥の、福島信夫山と枕言葉を誘い、信夫は恋路の忍ぶ恋。恋枕。恋衣。福島の手前、那須の殺生石に、「浮世の旅に迷ひ行く。心の奥を白河の。結び籠めたる下野や。那須野の原に着きにけり」・「不思議なりとよ玉藻の前は。殿上の交はりたりし身の。この御国に魂を。留めし事は何故ぞ」・「三浦の介。上総の介兩人に。綸旨をなされつゝ、那須野の化生の者を。退治せよとの勅を受けて」・「今遇いひ難き。御法を受けて。……あるべからずと御僧に。約束堅き。石となつて。鬼神の姿は失せにけり」に至る。

心の奥を白河、白河の縁語で知らかかはを響かせ、那須野の原に着す。

もう一曲、安達原(黒塚)資材は、大和物語、拾遺和歌集の平兼盛の
みちのくの安達が原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか

ワキの山伏祐慶の道行が「名にのみ聞きし陸奥の。安達が原に着きにけり」とあって、「真麻苧の糸を繰り返し昔を今になさばや」と伊勢物語の

古のしづの苧環くりかへし昔を今になすよしもがな

が引かれ、「心だに誠の道に叶ひなば。祈らずとても終になど。仏果

の縁とならざらん」「さてもさても五條あたりにて夕顔の宿を訪ねしは日蔭の糸の冠着し。それは名高き人やらん賀茂の御生に飾りしは糸化の車とこそ聞け」と、源氏物語「夕顔」に入る。さらに拾遺和歌集の平兼盛の歌をふまえ、「これは音に聞く。安達が原の黒塚に。籠もれる鬼の。住家なり。恐ろしやか、る憂き目を陸奥の。安達が原の黒塚に。鬼籠れりと詠じけん。歌の心も斯くやらんと」と「言ふ声はなほ凄まじき夜嵐の音に。立ちまぎれ失せにけり夜嵐の音に失せにけり」に至る。陸奥の安達ヶ原の黒塚は枕詞。もう一曲。錦木。これは、「げにや聞きても信夫山。その通路を訪ねん」と福島を越えて、陸中鹿角郡狭布ノ里。「陸奥の忍振摺誰ゆゑに。乱れ初めにし我からと藻に棲む虫の音に泣きて」「心の奥か陸奥の狭布の郡の名にし負ふ。細布の。色こそ変れ錦木の」に至る。陸奥の能楽は更に北上し、青森県の外ヶ浜を舞台にした善知鳥に尽きる。

以下福島(白河)の歌枕の反映した詞章の例示のみを連ねる。

融・「陸奥は何処はあれど塩竈の。うらみて渡る老いが身の。寄辺もいさや定めなき。」

千手・「陸奥の。忍ぶに堪へぬ雨の音。降りすさみたる折しもは。思

ひの露も。」

紅葉狩・「忍振摺誰ぞとも。知らせ給はぬ道の辺の。便に立ち寄り給へかし」

小塩・「春日野の。若紫の摺衣。忍の乱れ。限り知らずもと詠じせし

に。陸奥の忍振摺誰ゆゑ乱れんと思ふ」・「これもまたあづまの果し
なの人の心や」

蘆刈・「また安積山の言の葉は。采女の。杯取りあへぬ。うらみを述
べし故とかや。」

女郎花・「深く忍の摺衣の。女郎と契る草の枕を。並べしまでは疑ひ
なければ。」

杜若・「如何なる人の何事に依つて思ひの露の信夫山。しのびて通ふ
道芝の。」

花筐・「陸奥の。安積の沼の花がつみかつ見し人を恋種の。忍振摺誰
故ぞ乱れ心ハ君の為。」

玄象・「そよや陸奥の。千賀の塩竈は。名のみにて遠ければ。いかが
運ばん」

善知鳥・「末の松山風荒れて。袖に波越す沖の石。……千賀の塩竈身
を焦がす。」

鸚鵡小町・「業平の舞の袖。想ひ巡らす 忍摺木賊色の狩衣に。大紋の
袴の稜を取り。風 折烏帽子」

仲光・「住むかひもなき安積山。手習ふ事もなかりしかば」
現在七面・「陸奥の。安達が原の黒塚や。荒れたる宿のうれたきに、

仮にも鬼のすだくな。ると。詠みしも女の事かや。」
先に挙げた、

采女・「葛城の王。勅に従ひ陸奥の。忍摺摺誰も皆。事も疎かなりとて

設けなどしたりけれど。」・「されば浅積山。影さへ見ゆる山の井の。
浅くは人を思ふかの。心の花開け。」

四、芭蕉「奥の細道」

日本古典の最終は、近世の江戸文学。これも多々ある中で、元禄の
松尾芭蕉「奥の細道」は、『江戸―白河』を明示するものとしてあげ
る。テキストとした角川文庫『新訂おくのほそ道』の巻末「歌枕解説
索引」があつて、福島県は、会津根・浅香沼・浅香山・阿武隈川・黒
塚・信夫の里・白河の関・月の輪の渡しと数が多い。

「去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を払ひて、やや年も暮、春立てる
霞の空に、白河の関越えんと、」松島の月まづ心にかかりて」・「こと
し、元禄二年にや、奥羽長途の行脚ただかりそめに思ひ立ちて」と、
「上野・谷中の花の梢、又いつかはと心細し」とあつて、千住から陸
路、埼玉―栃木に入つて東山道は、日光―那須―殺生石と越える。遊
行柳は、

「また、清水ながるる柳は、蘆野の里にありて、田の畔に残る。」と
あつて、

田一枚植ゑて立去る柳かな

とある。白河の関は、「心もとなき日数重なるまゝに、白河の関に
かゝりて旅心定まりぬ。」と書き出される。「いかで都へ」と便り求
めしもことわりなり。」とあつて、

卯の花をかざしに関の晴着かな 曾良

あとは、須賀川で、「まづ「白河の関いかに越えつるや」と問われ、「長途の苦しみ、身心疲れ、かつは風景に魂奪はれ、懐旧に腸を断ち、はかばかしう思ひめぐらさず。」

風流の初や奥の田植歌

とある。浅香山・信夫の里「二本松より右に切れて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。」信夫の里「明くれば、しのぶもぢ摺の石を尋ねて、信夫の里に行く。」

早苗とる手もとや昔のしのお摺り

飯塚の里「月の輪の渡しを越えて、瀬の上といふ宿に出づ」、佐藤庄司が旧跡は、飯坂は、最後の地、

笈も太刀も五月にかざれかみ幟

後は、宮城野、末の松山 沖の石と名所旧跡が続き、宮城野に至る。やがて平泉だ。

白河・福島は歌枕・旅枕・恋枕の豊富な福の地―島だった。

五、日本近代文学から

明治近代に入つて、西欧文学文化の影響を強く受けながらも、日本古典は新しく再生され続けた。短詩型文学では、芭蕉は正岡子規にながる。近代の新しい俳句、短歌の世界が開かれた。子規の「紀行文集」(岩波文庫)「はて知らずの記」(明治二十六年七月二十三―九月

十日)に。

・「松島の風、象潟の雨、いつしかとは思ひながら病める身の行脚道中覚束なく、」

白河の関で着かへよひとへ物

・「白河駅に下る。忽ち雨、忽ち晴。半ば照り、半ば雨ふ。定まらぬ天気は旅人をもてなすに似たり。」・「白河の東半里許りに結城氏の城址ありと聞きて畦道辿り行く。」とあり、

雨折々あつさをなぶる山家

涼しさやむかしの人の汗のあと

夕顔に昔の小唄あはれなり

夏木立宮ありさうなところかな

「文学界」の北村透谷、島崎藤村にも、白河からの東北体験が表現されている。透谷「松島に於て芭蕉翁を読む」(明治二十五年四月)は、東北伝道の旅の体験記だった。藤村『春』のラストは次のような感動的なシーンだった。

・「汽車が白河を通り越した頃には、岸本は最早遠く都を離れたやうな気がした。」

『ああ、自分のやうなものでも、どうかして生きたい。』

斯う思つて、深く溜息を吐いた。」

また日本最初の詩集『若菜集』の中に、仙台の東北学院に赴任する途次を、

「草枕」

されば落葉と身をなして／風に吹かれて飄り／朝の黄雲にともな
はれ／夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか／われは道なき野を慕ひ／思ひ乱れてみち
のくの／宮城野にまで迷ひきぬ

さて私も、北海道から南関東の大学生となった最初の帰省は、上野
発。福島二本松下車。「智恵子抄」を携えての、智恵子の故郷を訪ね、

高村光太郎の詩碑を見るためだった。光太郎の

「樹下の二人」みちのくの安達が原の二本松松の根かたに人立てる
見ゆ

あれが阿多多蘿山、／あの光るのが阿武隈川。／かうやつて詞す
くなくに坐つてゐると、／うつとりねむるやうな頭の中に、ただ遠
い世の松風ばかりが薄みどりに吹き渡ります。

「山麓の二人」

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は／険しく八月の頭上の空に目を
みはり／裾野とほく靡いて波うち姿は／芒ほうほうと人をうづめ
る／半ば狂へる妻は草を藉いて坐し／わたくしの手にも重くもたれ
て／泣きやまぬ童女のやうに慟哭する／——わたしもうぢき駄目
になる

また、千葉人となった私は、犬吠埼の詩や、真亀納屋の文学碑を取
材した。

「千鳥と遊ぶ智恵子」

人つ子ひとり居ない九十九里の砂浜の／砂にすわつて智恵子は遊
ぶ。／無数の友だちが智恵子の名を呼ぶ。／ちい、ちい、ちい、
ちい、ちい、——

「裸形」

智恵子の裸形をわたくしは恋ふ。／つつましくて満ちてゐて／星
宿のやうに森厳で／山脈のやうに波うつて／いつでももうすいミス
トがかかり／その造型の瑤瑤質に／奥の知れないつやがあつた。
／智恵子の裸形の背中の小さな黒子まで／わたくしは意味ふかく
おぼえてゐて／今も記憶の歳月にみがかれた／その全存在が明滅
する。

光太郎に強い影響をうけた詩人にいわき市出身の草野心平がいる。
心平の「悲しみは光と化す」(新潮文庫『智恵子抄』)の序。

「光太郎智恵子はたぐいなき夢をきつきてむかし此所に住みき 高
村さんがそのやうにうたったアトリエは戦災で消失して、その跡には
平屋建ての家がたち現在は他の人が住んでいる。その、本郷駒込林町
二十五番地にあつたアトリエは明治四十五年に出来上つて高村さんの
独居自炊がはじまつた。当時長沼姓だった智恵子さんは、新築の祝い
にグロキシアの大鉢を持って訪ねていった。そして大正三年から正式
に二人の同棲がはじまつた。」

また、蛙の詩集は著名。その中の、

「冬眠」

大きな黒丸一つ、それだけの詩で、これは名詩、

「ぐりまの死」

ぐりまは子どもに釣られてたたきつけられて死んだ／取りのこ
されたうりだは／

葦の花をとつて／ぐりまの口にさした／半日もそばにゐたので苦
しくなつて水に這入った／顔を泥にうづめてゐると／くわんらく
の声音が腹にしびれる／泪が噴上げのやうに喉にこたへる／葦を
くはえたまんま／葦もぐりまも／カンカン夏の陽にひからびてい
つた

「磐城七浜」

突兀の岬と砂浜と。／岩礁帯と黒松の防風林と。／うねりくねつ
た海岸線に自然とできた岩城七浜。／イワキ 片仮名のするどさ
と。／いわき ひらがなのなだらかさ。／磐城 その漢字の岩
丈さをもつた磐城七浜を。／常に新しい太陽はまんべんなう照ら
す。

「上小川村」

ひるまはげんげと藤のむらさき。／夜は梟のほろすけほう。

山村暮鳥も福島に住んだ詩人。暮鳥の著名な「雲」

丘の上で／としよりと／こどもと／うつとりと雲を／ながめてゐ
る

おうい雲よ／ゆうゆうと／馬鹿にのんきさうぢやないか／どこま
でゆくんだ／

ずつと磐城平のほうまでゆくんか

後年、共産党書記長となる宮本顕治の妻となった福島の女性大作家
に宮本（中条）百合子がいる。百合子の

『貧しき人々の群』

・「私共の先代は、このK村の開拓者であった。首都から百里以上も
隔り、山々に取り囲まれた小村は、同じ福島県に属している村落の中
でも貧しい部に入っている。」

『伸子』

・「ああ、ああ、鳥さへ帰つて来るのに 君は 君は」

苦々しい心が湧き、伸子は目を逸した。飼鳥になつては堪らない。
さういふ心持がした。

「歌声よ おこれ」（昭和二十一年一月「新日本文学」創刊準備号）

私はこの「歌声よ おこれ」に強いエールを受けた幼年期を持つ。
長沼智恵子は、女性解放ののろしを上げた平塚雷鳥らの「青鞥」創刊
号の挿絵を描いた。そして中条百合子。福島はこうした意志の強靱な
女性を生んだ。

福島白河の芥川賞作家中山義秀を知ったのは、仲間との『厚物咲』

の読書会、研究会においてだった。義秀の

『碑』のラスト、

・碑の正面の苔を削りおとしてみると、

「般若峠」

といふ文字が微かにあらはれ、その下へ二行に

「東 利養道」

「西 涅槃道」

と記されてあるから、行脚の旅僧が仏の智慧をもつて衆生済度の発願をおこし、往時人馬のゆききの多かつたこの場所に建てたものであらう。

結文は、「奥路には時々かうした怪奇な馬主があるやうである。」

これはまさに幕末、陸奥街道の受けた喜怒の人間感情の表徴であるう。

以上は二〇二〇年十一月二十九日に白河市産業プラザ人材育成センターで開催された東洋大学出前講座の内容である。

白河市教育委員会生涯学習課が配布された講座案内の文面は、

《恋は大和言葉で乞いと同根で、魂ごい、魂しずめ、魂ふりなどの魂の求めで、五穀豊穡の祈りに通じます。一方愛の尊さはいうまでもありません。近代に入って欧米のラブ、アモール、リーベの訳語もこれを合わせて〈恋愛〉に落ち着きました。古典の古事記・まんようの手

弱女の惑いから、業平、小町、和泉式部を経て、世界的大作源氏物語

にいたる色好みの系譜や近現代の「三四郎」から「ノルウェイの森」まで恋愛小説の諸相を読み解きます。》

こうした案内に合ったか否か心許ない。

六 結一道行

序を、能楽の「遊行柳」から入ったのに倣って、結を、その「班女」から入る。

作者も同じ世阿弥元清、次第

・帰るぞ名残富士の嶺の。……行きて都に語らん 道行

・都をば。霞と共に立ち出でて。……暫し程経る秋風の。音白河の関

路より。また立ち返る旅ごろも。とあってあの能因法師の

都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

を踏まえつつ「音白河」、つまり音に聞く歌枕の白河の関路より、

陸奥国に所用をすませて立ち帰る旅姿、野上の里に着きにけり

・野上とは東路の。末の松山。波越えて帰らざりし人やらん末の松山

立つ波の。何か怨みん契り置く形見の扇其方にも、

古今集 読み人知らず 百人一首の

君をおきてあだし心を我が持たば末の松山波も越えなん
・が引かれ、「それぞと知られ白雪の。扇のつまの形見こそ妹背の仲
の。情けなれ」と能はとじられる。

日本近代文学の中に三島由紀夫の『近代能楽集』があり、「班女」

はその一曲。近現代においても白河は、奥州への出入り口。再会への際会の〈地一関〉であった。

私の白河行は寿福であった。講演会場への行くさに恵まれた「土民共楽」の南湖・翠楽苑。講演の翌日、車で案内をいただいた白河関所跡、白坂宿・遊行柳から境の明神・芦野宿・伊王野まで県境の那須際をめぐるおもてなし、教育委員会の主催者に感謝する。

さらに白河駅の案内板に小峰城まで五分とあるに勇をふるって、新白河への発の十五分の間を惜しんで城址公園に立った。快晴の冬の陽は、輝き、晴朗で清浄の気に張りめぐらされていた。

キーワード

- ・白河
- ・恋・愛
- ・歌枕・旅枕・恋枕
- ・日本古典
- ・日本近代